

# 武部勤のアジアの未来図



武部 勤氏 略歴

前衆議院議員(8期)。農林水産大臣(第33代)、自由民主党幹事長(第39代)、衆議院議院運営委員長(第63代)を歴任。議員時代にベトナム友好議連会長、インドネシア友好議連会長、メコン友好議連会長、モンゴル友好促進議連会長、パーレーン友好議連会長を務めたほか、昨年6月、自ら一般財団法人「東亜総研」を設立し代表理事・会長に就任。

## 資源大国モンゴルと共存、共生を！

北海道が今後ベトナムと深い繋がりを持つであろうことを前回紹介したが、今号では地理的にもさらに近い国、モンゴルについて述べたい。北海道には留学生、技術研修生として多くのモンゴル人が来道している。旭川市商工会議所の会頭(新谷龍一郎氏、新谷建設代表取締役社長)をはじめモンゴルで建設事業を展開している企業も少なくない。モンゴルと北海道は牧畜業が盛んであることや冬の寒さが厳しいことなど共通点も多い。

さて、去る6月4日「在札幌モンゴル国名誉領事」をモンゴル政府より拝命した。会長を務める一般財団法人「東亜総研」も併せアジア全体を俯瞰した地方自治体交流に尽力していく所存である。

モンゴルは人口300万人足らずであるが、資源大国として日本にとって重要かつ魅力的な国である。1991年の海部元総理によるモンゴル訪問以来、本当の自由と民主主義の国に生まれ変わった経緯もある。モンゴルが価値観を共有できる国として発展するために、両国関係を重視しさらなる支援協力を推進すべきだと考えている。

### 初のモンゴル訪問は23年前

私が初めてモンゴルを訪れたのは1991年のこと。海部俊樹総理(当時)が日本の首相としてモンゴルを初訪問した際に同行した。梶山静六自民党国会対策委員長(同)から「君は一所懸命頑張ったから総理に同行を許す」と言っていたが、内心で鼻を高くしたのを覚えている。

というのも当時は国会対策で活躍した議員には総理の外遊に同行できる「特権」が与えられる慣習があったからである。

派閥政治の全盛時代は別名「国対政治の時代」とも言われるほど、政治家が頭角を現すには国会対策副委員長となり、朝早くから夜遅くまで法案の成立に向け奔走する必要があった。

その過程で役所が頻りに国対に往来し「国対族」に頭を下げる。国対副委員長は党部会と関係省庁を担当するのだが、そこに族議員が生まれる素地があった。国対委員長は、幹事長とともに国会の華であり、国対副委員長はその登竜門として重要なポストであった

わけだ。

当時のモンゴルの印象は「ずいぶん若い国だな」というもの。とにかく20代の人々しか見当たらなかった。

### エルベグドルジ大統領との出会い

ツァヒヤール・エルベグドルジ大統領と初めてお会いした時のこともよく覚えている。

旧ソ連の崩壊はその過程で多くの血が流れたが、モンゴルは一滴の血も流さずガラス一枚も割らない、無血の民主化革命を成就している。そのときの立役者が当時の青年将校、現在のエルベグドルジ大統領だ。民衆から見れば将校である彼は保守派であり敵と見られる立場だったが、民主革命の闘士として活躍していたため双方から命を狙われた。しかし彼は卓越した指導力で無血クーデターを成功させたのである。

私は幹事長時代、昔の共産党だった人民革命党から招待を受けてモンゴルを訪れた時、民主党の党首だった彼にお会いしている。モスクワ大学を卒業しただけでなく、ハーバード大学の大学院を修了するなど英語も堪能。遊牧

民出身で乗馬も上手く、とにかく大変な魅力を感じたものだ。

その後、森喜朗先生に勧められ自民党日本モンゴル友好促進議員連盟の会長を引き受け、様々な活動を行ってきた。

2009年のエルベグドルジ氏の大統領就任式には、麻生総理の特派大使として出席している。

こうしたこともあり、政権交代により野党となってからも自民党議連がモンゴルを訪れた際、大統領は私達自民党7名の議員団に馬7頭を用意する異例の歓迎で迎えてくれた。2012年7月にはモンゴル国最高位の国家勲章である「北極星勲章」を授かるなど感謝に堪えない。

### タバントルゴイ炭田開発で注文も

当時、タバントルゴイの炭田開発で日本が中国、カナダ、アメリカとの入札に敗れるということがあった。

私が大統領に「日本は海部総理以来第3の隣国としてモンゴルの革命後の国づくりにどれだけ寄与したか。白鵬はじめモンゴル力士は日本の国技『相撲』を支えていただいている。そうい

う仲ではないか。日本とモンゴルは互に一番好きな国、民族同士と言って過言ではない。なぜ入札に敗れなければならないのか」と迫ったところ「絶対に日本を蚊帳の外に置くことはしない」と言ってくれた。

その後、大統領と首相と国会議長とで構成される最高決定機関である国家安全保障会議で入札のやり直しを決めたということだ。本当の理由は明確ではないが、私は大統領が約束を守ってくれたと思っている。

当時、日本政府も「大統領と武部さんの信頼関係がそこまであるとは」と驚き、有名にもなったものだ。

政権交代により安倍首相が返り咲いた時、私は「ベトナムとモンゴルにはできるだけ早く行っていただきたい」と申し上げた。安倍首相が初めての外遊先としてハノイ、次にウランバートルに飛ばれたことは周知のことである。

安倍首相はタバントルゴイ炭田の開発を巡り「日本企業に対する支援を期待する」と表明。モンゴル側も「長期に渡り日本に石炭を安定的に供給したい」と応じている。

私が引退した後、林幹雄先生が自民党日本モンゴル友好促進議員連盟の会長を務めておられる。同議連では国家間の巨大プロジェクトだけではなく、人的な交流の支援にも力を入れてきた。

ウランバートルの日本人墓地の墓守を30年以上もして下さっているオトゴンさんという方に出会った。彼は元モンゴル赤十字の局長だったというが、一度も日本を訪れたことがないという。彼を日本にお招きし表彰すべきだと考え、帰国後政府に申し入れた。外務省からはオトゴンさん一人分しか予算が出ず、奥様の分を自民党日本モンゴル友好促進議員連盟が負担し、ご夫妻での招待を実現することができた。

そのほか日本人墓地に桜を植えるなど緑化・公園化することも提案し、日本赤十字社にも協力を求め「ウランバートル日本人墓地緑化推進委員会」という募金の受け皿をつくっている。

## ロシアと中国に挟まれたモンゴルの苦悩

「ロシアのことを悪くいうと3日

石油の供給が止まる。中国の悪口を言うと言と鉄道が3日止まる」。モンゴルの苦悩を的確に言い表した言葉だ。

モンゴルは海がない陸封国。現在、港を利用するためには中国領内の2本の鉄道路線を利用する必要があるが、それでは中国との間で何かあれば輸出入がすべて止まってしまう。

そこで今、ロシア鉄道でウラジオストクに繋がたいと願っている。中国との間で仮に何かが起こった時、ロシアに一本鉄道があれば危険を回避することができるかもしれない。日本もこうした状況を理解し、協力する必要があるのではないか。

同国はAPECにもASEANにも加盟していないがこれではいけない。二階俊博元経済産業大臣がOECDのアジア版として、当時の小泉総理と相談し100億円の基金を確保。ジャカルタに本部を置いたERIA(東アジア・ASEAN経済研究センター)を立ち上げたが、二階先生のご尽力のもとモンゴルのERIA加盟も時間の問題だと思う。

北朝鮮問題の解決にも力を発揮してくれると期待している。かつて私はエルベグドルジ大統領に対し「あなたはいずれノーベル平和賞を受賞するでしょう。その前に一働きしてもらいたいことがある。それは北朝鮮の門戸を開くことです」と伝えたことがある。

モンゴルが北朝鮮と親しいのには理由がある。今日、越中関係が非常にシビアなものとなっているが、これまでの歴史を振り返ると中国は周辺国が大きくなろうとすると必ずと言っていいほど叩いてきた。

モンゴルも中露という超大国から強くなることは望まれていない。表向き友好国と言われてきたが、北朝鮮も中国からは永遠に「生かさず殺さず」の状態に置こうとされてきたのではない



ソドムジャブツ・フレバータル大使から「在札幌モンゴル国名誉領事」の辞令を与った

か。大国の周辺にある小国は、絶えず大国の圧力で苦しめられてきたことは歴史が物語っている。

## 日本にとってモンゴルは重要な国となる

モンゴルは石炭、ウラン、銅、レアメタルなど広大な国土に豊富な鉱物資源を持つ資源大国。資源小国の日本にとって、こうしたモンゴルでの資源開発・投資は経済復活に大きな役割を果たすだろう。

そのためにも「第三の隣国」として協力関係を発展させていく必要がある。なかでも人材教育には力を入れるべきだ。モンゴルでは富裕層が急増し大学卒業生も多くなりつつあるが、4年制の総合大学を卒業しても就職できず専門学校に入りなおし整備工となるなどのケースが多い。

モンゴル人力士を見てもわかるように、文法的に近いこともあり日本語を流暢に話す人が多い。誇り高い民族であり、白鵬や鶴竜、日馬富士といったモンゴル出身力士に大和魂のようなのを感じることができる。チンギス・ハンの末裔としての誇りがあるからではないか。

モンゴルは中国とロシアの狭間にありながら胸を張っている。